

横 道 遺 跡

—第12次発掘調査報告—

平成25(2013)年3月
久留米市教育委員会

序

久留米市は筑後平野の中心付近に位置し、耳納山地の緑と筑後川の水など、豊かな自然に恵まれています。平成17年2月の広域合併後、平成20年4月には中核市となり、福岡県南地域の中心都市として発展しています。このような発展を築き上げてきた先人達は、多くの文化を創造し、市内各所にはその足跡である貴重な歴史遺産が多く残されています。

本書で報告する横道遺跡は、市内でも有数の縄文時代の遺跡として知られ、また、平安時代半ばには、現在の市立南筑高等学校付近に筑後国府Ⅳ期政庁が移転したとされ、先史・歴史時代を問わず、市内の歴史を考えるうえで大切な遺跡です。今回の寄宿舍建設に先立つ調査でも、平安・鎌倉時代の遺構・遺物が確認されるとともに、縄文時代の生活跡も確認され、貴重な成果が得られました。

今回の発掘調査とその成果を収録した本書の発行によって、地域歴史の解明、さらに文化財保護の理解や普及、生涯学習等に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・本書の発行に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きました学校法人久留米大学や関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成25年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、寄宿舍建設に先立ち学校法人久留米大学の委託を受けて実施した、横道遺跡第12次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査に係わる事務は、久留米市教育委員会が調査主体となり、久留米市市民文化部文化財保護課の廣木誠が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、廣木・大淵文子・中野ゆみが行った。また、本書に掲載した遺物の実測は、非常勤職員の中里由佳絵が行い、図面の浄書は廣木・非常勤職員の高賀和子・中里が行った。なお、遺構配置図および出土遺物実測図は株式会社CUBIC製ソフト「遺構くんCubic」を用い、デジタルトレースで作成した。
4. 本書に掲載した遺構写真は、マミヤRB67を用い6×7判で廣木が、遺物写真はニコンデジタルカメラD700を用い当課の塚本映子が撮影した。また、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は国土調査法Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位は座標北を示す。
6. 本調査の略記号はYKM-012、調査番号は201213である。
7. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
8. 本書の執筆・編集は廣木が担当した。

目 次

I. はじめに	1
II. 横道遺跡の位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	16

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、寄宿舎建設に伴う事前の発掘調査である。平成24年5月17日、学校法人久留米大学より、久留米市御井町1647-3-25における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である横道遺跡に含まれ、昭和50年度に筑後国府IV期政庁の調査として行われた第1次調査を端緒とし、都合11次に亘る調査が実施されている。結果、縄文・古墳・平安・鎌倉時代の多くの遺構・遺物が確認されているため、対象地にも同時代の遺構が検出される可能性が高いことが想定された。その後の確認調査においても遺構を検出したことから、開発対象地内の建物建設予定地部分について発掘調査が必要である旨を回答した。その後、平成24年5月30日に学校法人久留米大学から「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成24年6月14日に学校法人久留米大学と久留米市長橋原則は「横道遺跡第12次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。現地調査は、平成24年7月2日から9月14日に実施し、出土品整理・報告書作成に係わる契約は平成25年3月31日までである。

2. 調査に係わる体制

調査委託：学校法人久留米大学

調査主体：久留米市教育委員会 教 育 長：堤 正則

調査総括：市民文化部 部 長：辻 文孝 次 長：佐藤光義

文化財保護課 課 長：古賀正美

課長補佐兼課主査：宮崎俊一 課長補佐：園井正隆

課 主 査：白木 守 辻 義則

庶務担当：豊福早苗

調査担当：廣木 誠 整理担当：古賀和子 中里由佳絵

発掘調査臨時職員

秋永絹子・大淵文子・柁島一男・川原初美・古賀勝治・佐藤朱美・高尾幹幸・中野ゆみ

溝口輝男

発掘調査整理臨時職員

小本美沙子

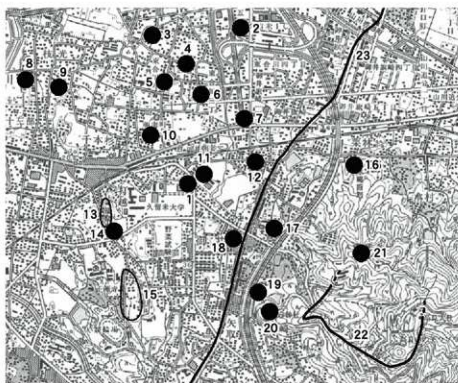
II. 横道遺跡の位置と環境

本遺跡は、市街地の東部に位置する御井町に所在し、現在は耳納連山の西端に聳える高良山（標高312m）の麓に集落が展開している。周辺には御井小学校、良山中学校、南筑高等学校、久留米大学といった教育施設が広がる地区でもある。遺跡は高良山から西へ派生する標高27～32mの中位段丘上に広がっている。

本遺跡は市内でも有数の縄文時代の集落遺跡として著名であり、草創期の隆起線文土器や続円孔文土器、早期の集石炉など、後期を除く時期の遺構・遺物が重層的に認められる。特に第8次調査においては膨大な数の遺物、集石遺構が確認された。本遺跡の北方には、晩期のヘボノ木遺跡、早・前期の上遺跡、前期の水洗遺跡、後・晩期の西小路遺跡、同じく神道遺跡などが所在している。また、東方に位置する二本木遺跡でも、第5次調査において不整形土坑が検出され、中期の船元式系土器が出土している。

弥生時代の遺構・遺物は二本木遺跡で確認され、中期に限られる。第3次調査では幅5m以上の大溝が検出され、その後の調査で総延長は120m以上に及ぶことが判明している。同遺跡の弥生時代集落はこの溝を東限とし、堅穴建物や土坑などで構成される集落が展開している。

古墳時代には、本遺跡で箱式石棺4基が検出された。また、南東1.6kmの丘陵上に市内最古の祇園山古墳（方墳）が築造されている。この他に周辺には幾らかの古墳群が存在したと思われるが、大半が未調査のまま後世の造成等によって消滅したようである。集落についても実態が把握できておらず、横道遺跡周辺では空白期間が存在する。



遺 跡 名

- 1 横道遺跡（第12次）
- 2 下見遺跡
- 3 西小路遺跡
- 4 水洗遺跡
- 5 上遺跡
- 6 ヘボノ木遺跡
- 7 神道遺跡
- 8 筑後国府跡Ⅰ期政庁
- 9 筑後国府跡Ⅱ期政庁
- 10 筑後国府跡Ⅲ期政庁
- 11 筑後国府跡Ⅳ期政庁
- 12 二本木遺跡
- 13 福聚寺古墳群
- 14 朝妻焼古窯跡
- 15 打越古墳群
- 16 山川前田遺跡
- 17 岩井川遺跡
- 18 日出原遺跡
- 19 祇園山古墳
- 20 磯山古墳
- 21 吉見城跡
- 22 高良山神籠石
- 23 薩摩坊ノ津街道

第1図 横道遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

飛鳥時代には、本遺跡において同時代の遺構は確認されていないが、高良山中腹には高良山神籠石が築かれるほか、山川前田遺跡や神道遺跡では、天武7年(679)の「筑紫大地震」によって生じた断層や地割れ跡も確認されている。

平安・鎌倉時代になると、筑後国庁が朝妻地区から横道地区へと移転し、本遺跡が第2の画期を迎える時期である。第1～5次調査では、11世紀末から12世紀後半までの官衙的な建物が確認された。遺跡の中央付近には東西方向の道路遺構が検出され、その北側に政庁域、南側に館、西側に正倉域が広がることが明らかとなっている。

近世を迎えると、薩摩坊ノ津街道が整備され、この地は「府中宿」として大きく発展し、当時の町並みは現代にも息づいている。また、南西500mの福泉寺に南接する隈山所在の朝妻焼古窯跡は、正徳4年(1714)に操業を開始した陶磁器窯であったが、肥前陶磁器との競合に敗れ、享保13年(1725)頃までの短期間で閉窯を余儀なくされた窯である。



第2図 調査地から高良山頂を望む(西から)



第3図 横道遺跡第12次調査地点図(1/2,500)

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の目的と経過

本調査地は、第1～5次調査地の南西100m、第8・9次調査地の南150mに位置する。これらの調査地から市道を挟んだ南側には、第7・10・11次調査地や大鳥居遺跡が存在する。第1～5次調査地は、市立南筑高等学校内にあたり、11世紀末から12世紀後半までの官衙的建物が検出され、筑後国府Ⅳ期政庁に比定されている。第8・9次調査地は、JR久大本線久留米大学前駅一帯にあたり、古墳時代前期の箱式石棺4基が確認されたほか、縄文時代早期の集石遺構や膨大な数に上る遺物が出土した。一方で、近接する第11次調査では、調査範囲に限りがあるものの、先史時代・歴史時代を問わず、先の調査と比べて検出された遺構・遺物は少ない。ただし、大鳥井遺跡では、Ⅳ期国庁に関連する総柱建物や道路状遺構が確認されている。本調査では、以上の成果を念頭に置き、本遺跡南側における遺構の分布状況を確認することを目的として、調査を実施した。

現地調査は、対象地内南側をⅠ区とし、廃土置き場の関係からⅠA区（西側）とⅠB区（東側）に分け調査を実施した。また、既存建物の解体後に調査を行った対象地内北側をⅡ区とした。平成24年7月2日、ⅠA区から重機による表土剥ぎを開始し、同日午後から作業員を導入して遺構検出を開始した。遺構の掘削・実測、写真撮影等を終えた7月10日には調査区を反転し、ⅠB区の調査



第4図 ⅠA区全景（東から）



第5図 ⅠB区全景（西から）



第6図 I区グリット調査後全景（西から）



第7図 II区グリット調査後全景（東から）

を開始する。検出作業、遺構掘削と進め、実測・写真撮影を随時行う。7月24日にはI区の調査を終え、埋め戻しを完了した。その後、既存建物解体のため、現地を引き渡す。8月20日、II区の調査を再開する。表土を除去した西側から遺構検出を実施し、検出を終えた後、遺構の掘削を開始した。これに並行して遺構実測、写真撮影を行い、9月3日に遺構の掘削を完了。翌日にスカイマスターを用いて全景写真撮影を実施した。

同日、調査区西側において、一部

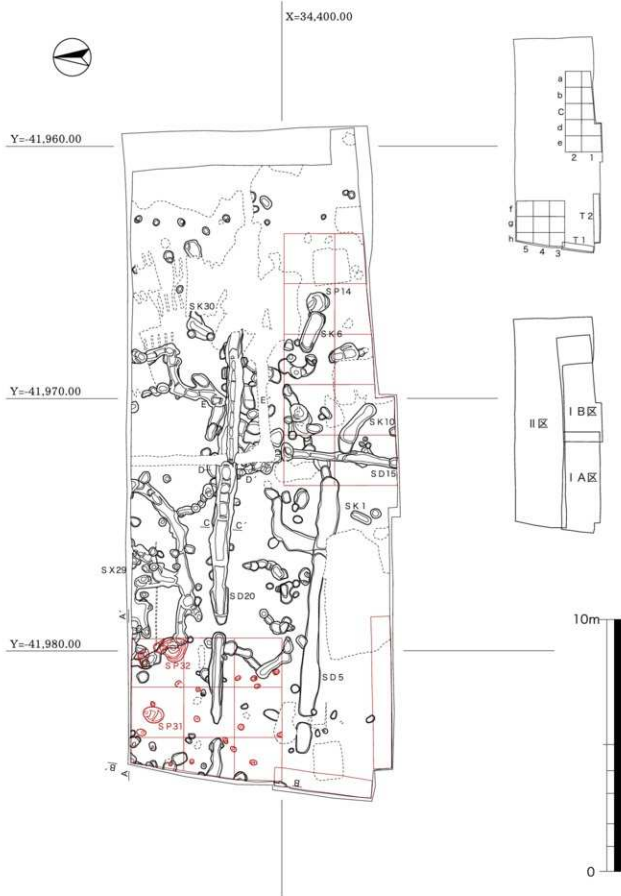
グリット調査を行い下層遺構の確認を行う。検出遺構の掘削、記録作業を終えた後、9月13・14日に重機で調査区を埋め戻し、発掘機材を撤収して、全ての現地作業を終了した。個別遺構・土層断面図（1/10・1/20）は手測りで作製し、それ以外の遺構実測はトータルステーションを用い、その記録は株式会社CUBIC製ソフト「遺構くんCubic」で編集・保存している。遺構の記録写真は、マミヤRB 67を用いてカラーリバーサル・モノクローム6×7判で撮影した。

2. 検出遺構と出土遺物

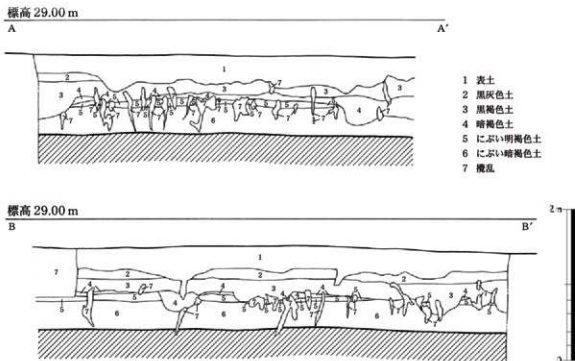
本調査地は、東の高良山から派生する標高28.5mの中段丘上に位置し、南東から北西へ緩やかに傾斜している。調査対象地は以前から宅地として利用され、I区およびII区東側では遺構の削平や攪乱が著しい。基本層序は、調査区西側で盛土が約30～40cmであり、以下遺物包含層である黒



第8図 II区全景（西から）



第9図 横道遺跡第12次調査遺構配置図(1/150)、グリット・トレンチ位置図、調査区区分図



第10図 II区西壁・北壁西側土層図(1/50)

灰色土(第2層)が20 cm、黒褐色土(第3層)が20～30 cm堆積する。この下位に暗褐色土(第4層)が部分的に5～10 cm堆積し、調査区中央付近では顕著に確認できた。この下層は、にぶい明褐色土(第5層)が10 cm、にぶい暗褐色土(第6層)が40 cm認められ、黄橙色土を呈する地山に至る。第5層上面で検出した遺構を上層遺構とし、地山で検出した遺構を下層遺構とした。検出面の標高は上層で28.0 m、下層で27.5 mである。以下、主要遺構について層別別に報告する。

a) 上層の遺構

検出遺構は、溝状遺構3条、土坑4基、不明遺構1およびピットである。I A区では、土層堆積状況を確認するためのトレンチを2箇所設け、I B区では、暗褐色土を埋土とする遺構のプランの把握が困難であったため、黒色土系に覆われた遺構の掘削と記録を終えた後、2 mグリットを掛け、プランの把握を行った。

溝状遺構

SD 5 (第9・11図)

I A区北側、I B区西端で検出した。東西方向に走り、両端が途切れている。規模は長さが9.5 m、幅が0.4～0.8 m、深さが3 cmを測り、残存状況は悪い。底面はほぼフラットであった。埋土は黒褐色土の単層で、埋土内からは縄文土器が出土したが、混入品と考えられる。なお、本遺構の西側で検出した、土坑状の平面



第11図 SD 5完掘状況(西から)

形を有する遺構も、検出位置、規模や埋土から同一の遺構であった可能性がある。

SD 15 (第9・12図)

グリット掘削後、I B区西側で確認した。SK 10に先出する。南北方向に走行しているが、Ⅱ区で延長部分を確認することはできなかった。規模は長さ4.2m、幅0.3mで、深さは中央部分で5cmを測り、南北両側に行くに従い深くなる。北側で8cm、南側で10cmを測る。断面形はU字状を呈し、埋土は暗褐色土を呈する。埋土内からは黒曜石細片が1点出土した。



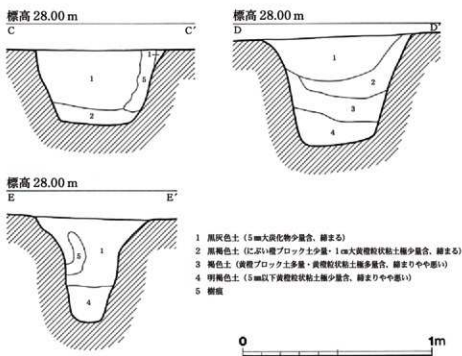
第12図 SD 15完掘状況（北から）



第13図 SD 20完掘状況（東から）

SD 20 (第9・13・14図)

Ⅱ区中央から西側にかけて検出した。東端に攪乱を受けている。検出規模は長さ11.7m、幅0.4～0.85mで、歪な形状を呈する。深さは東が5cm、西が17cm、中央部分が40～60cmを測り、中央に行くに従い深さを増す。中央部分の壁面は、外傾して立ち上がる場所と、直に立ち上がった後、外湾して上端に至る場所を確認した。埋土は黒色系の土壌を基調とし、下層に褐色系の土壌が堆積する部分も観察でき、全体的にブロック土を多く含んでいた。埋土内からは土師器小



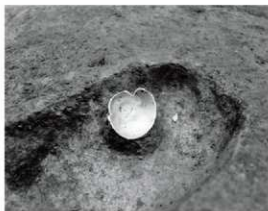
第14図 SD 20土層図（1/20）

皿片・甕片・把手片、黒色土器A類片、須恵器捏鉢片、白磁皿片、青磁碗片が出土した。また、混入品と考えられる縄文土器および黒曜石剥片も出土している。

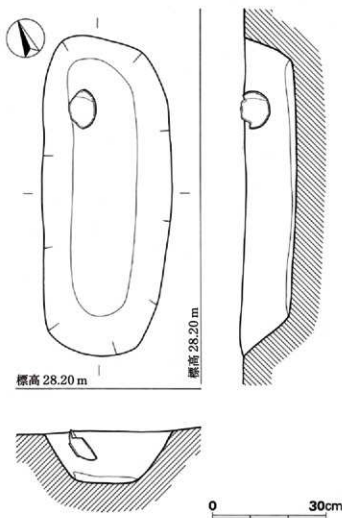
土坑

SK 1 (第9・15・16図)

I A区南東で検出した。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸長0.84m、短軸長0.34mを測る。深さは14cmで、床面はレンズ状を呈す。壁面は若干内湾して立ち上がり、上端に至る。埋土は黒褐色土の単層で、本遺構からは床面から7cm浮いた状態で緑釉陶器碗が出土した。出土状態から北西方向からの流入が推定される。この他に、縄文土器細片も出土しているが、混入品と考えられる。



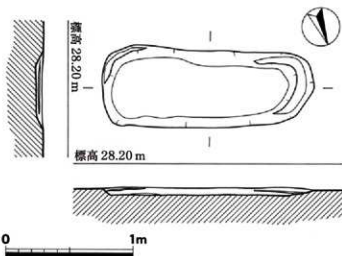
第15図 SK 1遺物出土状況(南から)



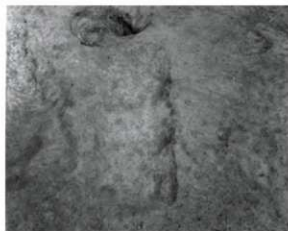
第16図 SK 1実測図(1/10)

SK 6 (第9・17・18図)

I B区中央で検出した。SP 14に後出する。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸長1.7m、短軸長5.5~6.5mを測り、深さは6cmで、床面はフラットである。西側及び南東隅に床面から3cm上位に狭長なステップを有する。埋土は黒褐色土の単層で、褐色ブロック土を多く含む。埋土内からは、土師器細片が一点出土した。



第17図 SK 6実測図(1/30)



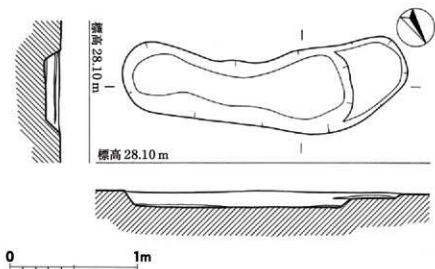
第18図 SK 6 完掘状況（北西から）



第19図 SK 10 完掘状況（南東から）

SK 10（第9・19・20図）

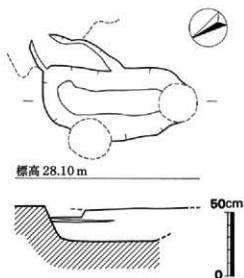
グリット掘削後、I B区西側で確認した。SD 15に後出する。平面形は不整形で、規模は長軸長2.25m、短軸長0.45～0.65mである。深さは13cmを測り、床面はフラットである。遺構内西側には50cm×45cm程を測る幅広のステップを設ける。埋土は暗褐色土の単層で、遺物は出土しなかった。



第20図 SK 10 実測図（1/30）

SK 30（第9・21図）

Ⅱ区中央東側で検出した。ピットに先出し、東側の一部に攪乱を受けている。平面形は不整形で、東側に張出し部を設けた、一部が突出した形状を呈する。張出し部は、埋土が同質であり、前後関係を確認できなかったため、同一遺構と判断した。規模は長軸が検出長さ1.65mである。短軸が0.45～0.55mで、張出し部を含めると0.7m程を測る。深さは28cmで、床面はフラットであった。床面と張出し部の比高は、17cmである。埋土は暗褐色土で、埋土内からは細片であるが縄文土器が1点出土している。



第21図 SK 30 実測図（1/30）

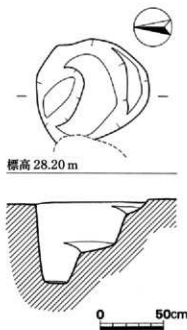
ビット

SP 14 (第9・22・23図)

ⅠB区中央東よりで確認した。SK 6に先出する。平面形は円形で、規模は径が80～90 cm、最深部が65 cmを測る。遺構内南側の中位と上位にステップが設けられている。このため、壁面は南側に階段状を成すのに対し、北側はほぼ直に立ち上がり、上端に至る。埋土は暗褐色土で、遺物は出土しなかった。



第22図 SP 14完掘状況 (南から)

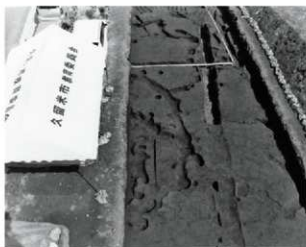


第23図 SP 14実測図 (1/30)

不明遺構

SX 29 (第9・24図)

Ⅱ区北西で検出した。北側の大半が調査区外に及ぶ。従って、詳述はできないが、周縁部が円形を成すと推定される溝状の掘り込みを、また、中央部が歪な形状を呈す土坑状の掘り込みを確認した。埋土はいずれも暗褐色を呈し、先後関係は認識できなかったため、同一遺構と判断している。規模は長軸の長さが7.4 m、短軸の検出長さが2.5 mである。周縁部は、幅40～60 cm、深さ10～15 cmを測り、部分的にビット状に深く掘削されている。中央部は深さが20 cmであり、底面でビット状の掘り込みを複数検出した。これらは、南側中央と西側で連結しており、中央部に向かって高さを減じている。遺物は出土しなかった。



第24図 SX 29完掘状況 (西から)

b) 下層の遺構

時間的な制約上、Ⅱ区西側のみ東西・南北6 mの範囲に、2 m四方のグリッドを設定し、下層遺構の確認を実施した。結果、複数のビットを散在的に検出した。ビットの大半は、径25 cm前後、深さ30 cm程であり、埋土はいずれもにぶい暗褐色土であった。以下、主要なものについて、詳述する。

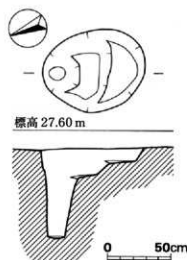
ビット

SP 31 (第9・25・26図)

5-gグリット
トで検出した。
平面形は倒卵形
で、規模は径が
65～80 cm、最
深部が70 cmを
測る。SP 14
と同様、遺構内
南側に2段のス
テップを有す。



第25図 SP 31完掘状況(南西から)

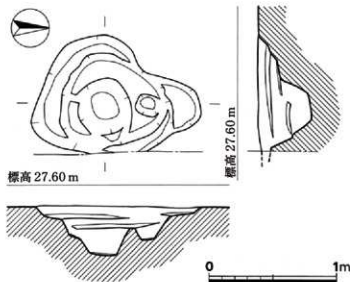


第26図 SP 31実測図(1/30)

壁面は北側が直に立ち上がる一方で、南側が階段状を成している。埋土内からは縄文土器片が1点出土した。

SP 32 (第9・27図)

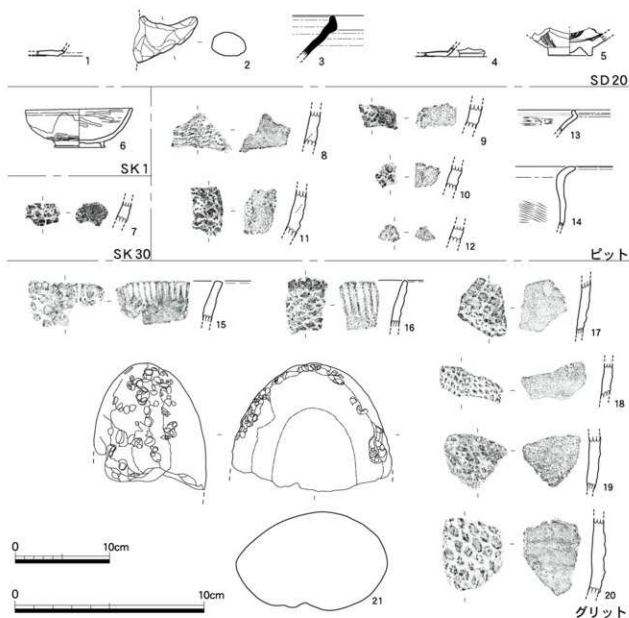
5-fグリットで検出した。一
部調査区外に及ぶ。平面形は不整
形で、規模は長軸長130 cm、短
軸長95 cmを測る。下層で検出し
た遺構の内、最も規模が大きい。
遺構内には複数のステップが確認
でき、凹凸が著しい。また、ほぼ
中央には検出面から深さ42 cm、
その北側には26 cmの掘り込みが
認められた。本遺構から、遺物は
出土しなかった。



第27図 SP 32実測図(1/30)

c) 出土遺物 (第28・20図)

バンコンテナー1箱分の遺物が出土した。遺構に伴う出土遺物は少なくSD 20から小袋1袋分が出土したほかは、ビット出土の細片が大半である。また、I A区ではトレンチ調査を、I B区およびII区ではグリット調査を実施した。I A区トレンチ掘削中には、縄文土器片4点、石器1点が、I B区グリット調査中には、下層の検出面には至っていないが、縄文土器片12点、細片2点が出土し、II区では縄文土器片7点、石器2点、被熱石5点を確認したにすぎない。遺物実測図を掲載しなかったものについては、やむを得ず遺物写真で対応した。あわせて遺物観察表を参照されたい。



第28図 出土遺物実測図 (1/2・1/4)

第1表 出土遺物観察表①

遺物 NO	出土 遺物	種 別	器 形	法 業			色 調		調 整		粘 土 (材質)	備 考	登録 番号
				口縁 (長)	底縁 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
1 第28図	SD20	土師器	皿	—	—	(0.65)	にがい・橙	にがい・橙	ナゲ	ナゲ	黒砂粘 (黒鉄)・赤粘 (赤色粘土)	赤切り 飯目	201213 000008
2 第28図	SD20	土師器	把手	—	—	(5.05)	橙	—	ナゲ	—	砂粘 (石炭・黒岩・赤 色粘土・黄褐色)	—	201213 000007
3 第28図	SD20	土師器	杯鉢	—	—	(4.45)	灰白 灰黄	灰黄	同転ナゲ	同転ナゲ	砂粘 (石炭・赤色粘 土・黒粘)	東照寺杯鉢の 複製	201213 000010
4 第28図	SD20	白磁	小皿	—	—	(1.0)	(輪) 灰白	(地) 灰白	同転ナゲ	同転ナゲ	灰白焼具	ヘラ切り 底-2	201213 000009
5 第28図	SD20	青磁	碗	—	4.8	(2.9)	(輪) 灰白	(地) 灰黄	ヘラタビリ 顔目文	同転ナゲ 筆墨文	灰白焼具	河原田 1-15	201213 000011
6 第28図	SK1	緑釉陶器	埴	11.25	5.2- 5.35	3.95- 4.25	(輪) オリーブ黄	(地) 灰白	ヘラタビリ ミガキ ナゲ	ミガキ	砂粘 (石炭)	河原田 見込みにニ文 のトナ目有り	201213 000001

第2表 出土遺物観察表②

遺物 NO	出土 遺構	種 別	部 形	法 量			色 調		調 整		胎 土 (材質)	備 考	登録 番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
7 第28区	S K30	縄文土器	鉢	—	—	(2.6)	浅黄褐色	にぶい黄褐色	横門	ナゲ	砂粒 (石膏・角閃石・赤色粘土)		201213 000013
8 第28区	S P3	縄文土器	鉢	—	—	(4.05)	橙 浅黄褐色	にぶい黄褐色	条痕	ナゲ	砂粒 (石膏・角閃石・黒曜石・長石)		201213 000002
9 第28区	S P8	縄文土器	鉢	—	—	(2.75)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	条痕	ナゲ	砂粒 (石膏・角閃石・赤色粘土・黒曜石)		201213 000004
10 第28区	S P11	縄文土器	鉢	—	—	(2.95)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	横門	ナゲ	砂粒 (角閃石・赤色粘土・黒曜石)		201213 000005
11 第28区	S P13	縄文土器	鉢	—	—	(5.25)	橙	橙	横門	ナゲ 微細な点	砂粒 (角閃石・赤色粘土・石膏)		201213 000006
12 第28区	S P21	縄文土器	鉢	—	—	(2.2)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	横門	ナゲ	砂粒 (石膏・角閃石・赤色粘土)		201213 000016
13 第28区	S P22	縄文土器	浅鉢	—	—	(2.3)	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ナゲ	条痕	砂粒 (石膏・長石・黒曜石・赤色粘土・角閃石)		201213 000012
14 第28区	S P26	土器	壺	—	—	(6.4)	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	橙 にぶい黄褐色	ナゲ	ナゲ 網目目	砂粒 (石膏・長石・赤色粘土・黒曜石)	外面スリ目	201213 000012
15 第28区	G 2 e	縄文土器	鉢	—	—	(4.6)	にぶい黄褐色	橙 灰褐色	横門	原形条痕	砂粒 (角閃石・黒曜石・石膏・赤色粘土)		201213 000026
16 第28区	G 5 f	縄文土器	鉢	—	—	(5.1)	暗灰黄褐色 灰黄褐色	にぶい黄褐色 灰黄褐色	横門	原形条痕	砂粒 (長石・石膏・角閃石)		201213 000034
17 第28区	G 1 c	縄文土器	鉢	—	—	(6.25)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	横門	ナゲ	砂粒 (角閃石・石膏・黒曜石)		201213 000025
18 第28区	G 1 d	縄文土器	鉢	—	—	(4.3)	灰黄褐色 黄褐色	にぶい黄褐色	横門	ナゲ	砂粒 (長石・角閃石・黒曜石)		201213 000025
19 第28区	G 1 e	縄文土器	鉢	—	—	(5.85)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	横門	ナゲ	砂粒 (角閃石・石膏・長石・黒曜石・赤色粘土)		201213 000024
20 第28区	G 3 f	縄文土器	鉢	—	—	(8.4)	にぶい黄褐色 黄褐色	にぶい黄褐色	横門	ナゲ	砂粒 (石膏・角閃石・黒曜石)		201213 000030
21 第28区	G 3 g	玄武岩	磁石 (6.75)	8.0	5.2	—	—	—	—	—	—	250 重	201213 000032
23 第31区	T 1	黒曜石	簾	1.6	1.7	0.25	—	—	—	—	—	0.6 重	201213 000036
24 第31区	G 4 g	黒曜石	簾	1.85	1.2	0.3	—	—	—	—	—	0.7 重	201213 000036

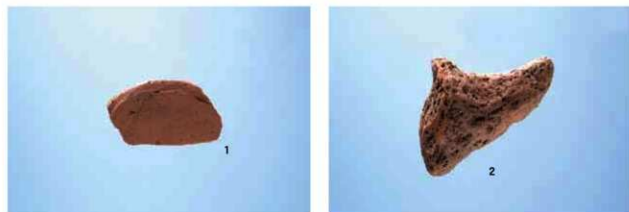
遺物観察表の凡例は下記のとおりである。

口径 (長)・底径 (幅)・器高 (厚) の単位はcmである。

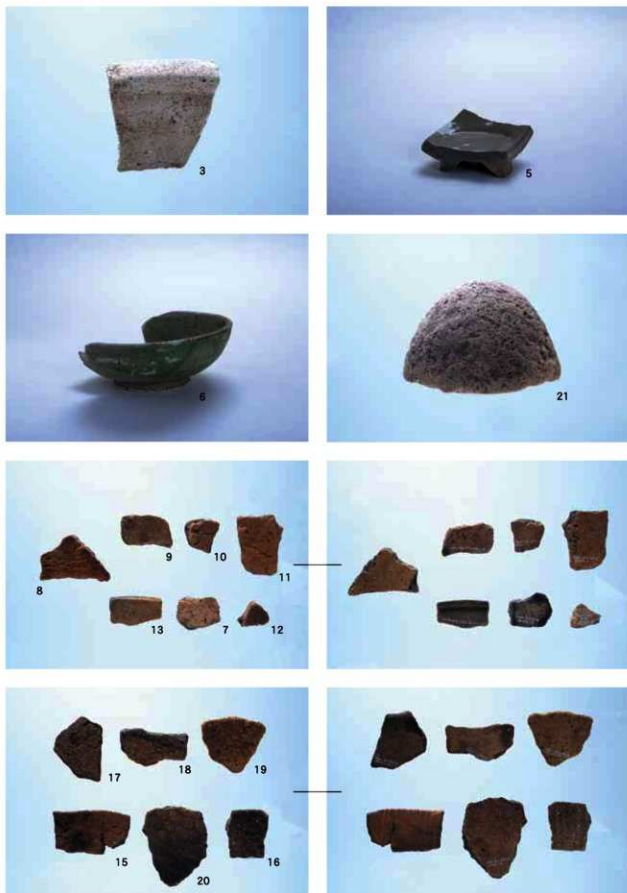
出土遺構の項目中、Gはグリット、Tはトレンチを、また、法量の () は現存値を示す。

色調は『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社 1997年版)による。

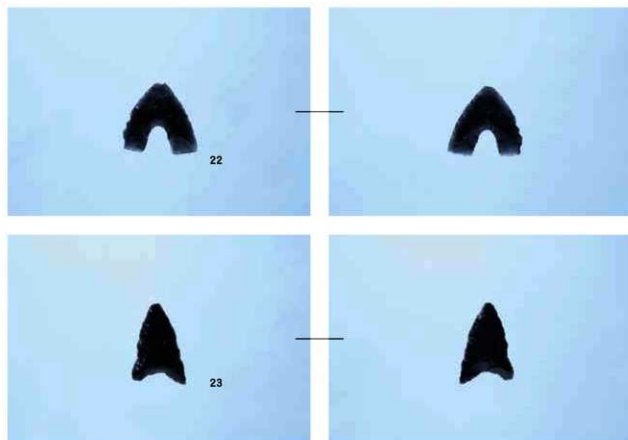
登録番号は久留米市市民文化財文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。



第29図 出土遺物 (写真①)



第30図 出土遺物（写真②）



第31図 出土遺物（写真③）

IV. 総括

横道遺跡第12次調査は、寄宿舎建設に先立つ発掘調査で、建物建設予定地の内266㎡について調査を実施した。結果、過去の調査成果と同様、本調査地も2層の遺構面で構成されており、上層で溝状遺構3条、土坑4基、不明遺構1基およびピットを、下層でピットを検出した。

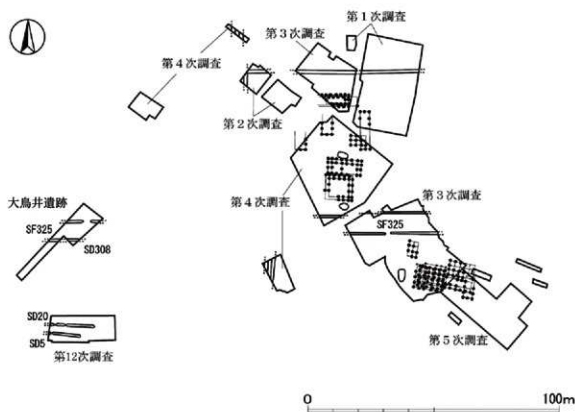
上層で検出したSD15、SK10、SK30、SX29、SP14については、歴史時代の遺物包含層の下層にあたる暗褐色土を埋土とすることから、歴史時代以前の所産と考えられる。SK30から押型文土器片が出土しているが、混入品と推定され、詳細な時期は不明である。また、それらの用途についても把握できなかった。

溝状遺構の内、SD5は出土遺物に恵まれず、残存状況も良好とはいえないため、性格については不明である。この遺構はSD20と並行関係にあり、道路状遺構の可能性も考えられた。そのため、Ⅱ区グリット調査の際に、平面・断面観察を行ったが、路面と考えられる痕跡は確認できていない。SD20は出土遺物から12世紀代の所産と思われ、その形態から取排水を目的としたものとは考え難い。北方40mに位置する大鳥井遺跡では、12世紀前半に比定される道路状遺構SF325が検出されている。この時期には、市立南筑高等学校内に長大な掘立柱建物を口字型に配した政庁城が、その南側60mに館と考えられている掘立柱建物群が営まれ、SF325はこれら政庁城と掘立柱建物

群の間を東西に横断するように延びていることが判明している。本調査で検出したSD 20はこのSF 325にほぼ並行すること、また、その形態から、区画施設の構成要素の1つである可能性がある。なお、SD 20とSF 325の南側側溝であるSD 308間の距離は約33mを測る。

土坑については、SK 6は出土遺物と埋土から歴史時代と推定され、SK 1は出土した緑釉陶器の碗から10世紀後半から11世紀初頭の所産と考えられる。横道地区にIV期政庁が造営された前代の様相については、第10次調査で10世紀後半から11世紀初頭に位置付けられる土墳墓などが確認されているが、概して遺構としてのまとまりはなく、不明な点が多い。隣接する二本木遺跡でも同様の傾向を示すが、本調査地から東方500mに位置する二本木遺跡第29次調査では、廃棄土坑から緑釉陶器の蓋片が出土しており、共伴遺物から11世紀初頭と推定される。SK 1出土の緑釉陶器はその資料と併せて本遺跡一帯の当該期の様相を探る手がかりの一つとして注目され、今後の調査の進展が期待される。

下層では、複数のピットを検出したものの、過去の調査のように集石遺構などを確認することはできなかった。時間の制約上、部分的な調査ではあったものの、トレンチ・グリット調査中に出土した遺物量をみても、過去の調査とは比較にならないほど少量である。従って、本調査地は同時期の遺構分布域の縁辺にあたるものと思われる。



第32図 横道遺跡第1～5・12次調査・大鳥井遺跡第1次調査模式図(1/1,500)

報告書抄録

ふりがな	よこみちいせき		
書名	横道遺跡 —第12次発掘調査報告—		
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第326集		
編著者名	廣木 誠		
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課		
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 Tel 0942-30-9225 FAX 0942-30-9715 Email:bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp		
発行年月日	平成25(2013)年3月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
上 ち ね ち り ち 横道 遺 跡 第12次調査	く る め し み い ま ち 久留米市 御井町 1647-3、1647-25	40203	030289	33 ° 18 ' 33 "	130 ° 32 ' 57 "	20120702 ～ 20120914	266㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
横道 遺 跡 第12次調査	集落	縄文 平安～鎌倉	溝状遺構		縄文土器、土師器、黒色土器、須恵器、輸入陶磁器、緑釉陶器、石器		調査地は筑後国府Ⅳ期政庁が確認された第1～5次調査地の南西100mに所在する。調査の結果、Ⅳ期政庁が機能した時期に並行する溝を検出したほか、縄文時代早期の遺構・遺物が出土している。	
			土坑		1条			
			ピット		1基			
			不明遺構		1			
要約								
調査地は高良山から北西に派生する標高28mを測る中段段丘上に立地し、筑後国府Ⅳ期政庁が確認された第1～5次調査地の南西100mに所在する。本遺跡では上下2層の遺構面が確認されており、本調査地も2層の遺構面で構成される。上層ではⅣ期政庁と同時期の溝が確認されたほか、周防産緑釉陶器が出土した土坑などが検出され、注目される。下層では縄文時代早期の遺構・遺物を検出したが、早期の集石遺構や膨大な量の縄文土器が出土した第8次調査などと比較すると、その量は非常に僅少であり、本調査地は、当該期において分布域の縁辺にあたるものと推定される。								
土木工事の届出日		平成24年5月29日			遺物の発見通知日		平成24年9月19日 (24文財第717号)	

横道遺跡

— 第12次発掘調査報告 —

久留米市文化財調査報告書 第326集

平成25年3月31日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷 服部印刷株式会社

久留米市梅満町410-1